

『オレステス』の一回大会研究発表要旨

(昭和41年7月9日)
於 弘前市民会館

正義について

『アイスキュロスのオレステス』三部作に見る

文学部哲学専攻 外山俊平

この小文は「正義について」であります。いわゆる正義論ではありません。ただこの作品を読んだ後で、自分の頭に光り輝いたのがディケー（正義）でありましたので、右の如き題をつけたわけであります。その先まで言及する為にはおそらく、かの予言を辟ひ出さねばならないかも知れません。

アイスキュロスは紀元前五二五／四年アテナイの北西で、アッティカの聖地と言われるエレウシスにエウポリオンを父として生まれ、同四五六年シケリアのゲラでその生涯を終えました。詩人であると共に一兵士でもあった彼の墓碑銘には、自らのマラトンの野における武勲のみを記してあったとされています。この三部作は、他に今は伝わらないサテュロス劇一篇と共に彼の死の二年前、四五八年にアテナイのデジオニュソス劇場で上演され、首位を獲得した作品であります。

三部作として現存する唯一のもので『アガメムノン』、『供養する女たち』、『慈みの女神たち』から成っております。この最後の作品では、忌まわしい呪いのかゝったアトレウス家に、アルゴス王でトロイア遠征の総大将となったアガメムノンの子として生まれ、幼年を異郷で過ごしたオレステスの、父の仇討が母殺しであるという宿命的な苦悩が描かれ、最後にアレスの丘の法廷で、投票が同数の場合は無罪というアテナ女神の約束のもとに救われて行く悲劇が扱われています。その後半の、主人公が救われる場面は詩人の独創であります。王がその后クリュタイメストラと情夫アイギストス（アガメムノンの従兄弟に当る）の策謀で、イリオンから帰国した途端に殺され、オレステスが彼らに復讐するという筋は既にホメロスに見えるのであります。（『オデュッセイア』巻四、十一巻参照）そこでは叙情詩人の悩める人向を描く静かな眼差しがあるのに対し、この三部作ではエリニュエス（復讐の女神たち）によって絶えず苦しめられる、人向の運命的苦悩に詩人の涙がそゞがれ、そして彼の正義に対する篤い信仰によって、血で血を洗う悪循環が断たれ

て行くのであります。

さて、この作品でまず言えるのは、人向と神とが極めて接近していることでありましょう。オ一部で、コロス（合唱団）が、トロイア遠征前のアルゴスの状態を歌うところによれば、遠征の肯定と否定が予言者を通じて告げられ、また、オ二部、オ三部では明らかに神意が直接主人公の行為を命じているのであります。

そこで、この神と人向との「接近」ということを定場にしてあるゆゑないディケーの光明へと進んでゆきたいと思ひます。こゝでおことわりしたいのは、発表の時、再び読む今とでは、多少作品のとらえ方が違っていることとあります。すなわちあの時は、この三部作が一種の弁証法を構成していると考えて、オ一部でフリニメイメストラの行為を善、オ二部でオレステスの行為を善、そしてオ三部では、エリニユエスがアテナの説得によってエウメニデスと変り、それによってオレステスが責苦から救われて行くと解釈して、そこにこの詩人の正義に対する信仰を見たわけでありましたが、今異なると言うのは、オ一部でアルテミス女神の怒りを取り上げ、王后の王に対する、我が娘を取られた悲しみ（エウリピデス『アウリスのイピゲネイア』参照）に共感を示して、逆に王の行為をヒュプリス（驕慢）とし、王后の行為に正義を冠している点であ

ります。もう一つ理由としては、かのヘレネと姉妹である王后の行為に、アプロディテの意志を認めることも出来るからであります。そしてオ二部までの状態では、未だ古い神であるエリニユエスが権威をふるっていたのだとするわけであります。ところで「接近」ということを足場にしたのは、二の人向の行爲に神の意志が働いていることを強調するためであります。しかし神の意志が働いていると言つても、アガ멤ノンにおけるが如く、そこには行爲の選択の自由があるのを認めねばならないでしょう。従つて人がアテー（災厄）に陥いること少なく、幸福を願うからには、「何事も一番良いのは程々であること」という彼の道德観を語っているわけであります。また詩人は「ヒュプリスはアテーを生むのが必然の掟」と人向に敬虔であることを求めているのであります。

他方彼の宗教観は、オ一部、オ二部に見られるように、そこでは未だゼウスが絶対権を持っているのではなく、父神に反抗する、あるいはアプロディテが、あるいはアルテミスが、めいめいに自分の正義を主張して、そこには何ら統一性もないのであります。オ三部に至つて、ゼウスの意志を伝えるアポロンの助けをえてのオレステス并明、アテナのオレステスへの一票、そしてエリニユエスを説得によつてその心を和らげ

て行くという過程に見られる、その進化的にあると思われれます。神界における道德的進化を信ずるわけであります。すなわち彼の宗教観によつて、オリンポスの神々はゼウスを主神としたピラミッド型を形成するに至るのであります。かくして、正義はゼウスの手中にあると結論されるのであります。

(発表の時の冒頭部と結論部を再び考究し、新たに書いたもので作品の紹介はここに繰り込んだ程度で省略させて戴きました)。

一九六六年九月三日

ロジャーズにおける カウンセリング

ハル市立小中
野中学校教諭 齊藤庄一

一、心理的適応

自己知覚 *self-perception* (自己についての、および他人に対する関係についての一切の知覚⁽¹⁾)と、自己概念 *self-concept* (意識にのぼることを承認されることのできる自己についての概念の体制化された形態 *organized configuration*⁽²⁾、自己像 *self-picture* ともいう)との関係が、我々の心理状態や行動を複雑なものである。一般に、我々は、自己概念にふさ

わしくない自己知覚を防衛的に否定したり、抑圧したりする傾向をもつ。

心理的不適応とは、このような自己不一致に少しでも気付いていることからくる不安であり、緊張状態である。逆に「その人の自己知覚の仕方一切が、組織された意識的な自己概念の中に受け容れられるならば、その時は、そこには快適感と緊張の解消が付随的にみられ、そのことは、心理的適応として経験される⁽³⁾」のである。

かくして、適応の定義は「外部的現実⁽⁴⁾に依存するというよりは、むしろ内部的な事柄⁽⁴⁾になつてくる⁽⁴⁾」のである。

二、知覚変容と行動の変化

個人は、自己が中心である経験の世界に生きている。この世界は、個人によつて経験されるものすべてを包含しているが、それらの経験のうち、ほんの一部分が、個人によつて意識的に経験されるのである。しかし「可能性として、私が、それを完全に知ることのできる唯一の人間である⁽⁵⁾」わけである。

有機体は、経験され認知されるところのものに対して反応する。この認知の場は、「個人にとつて真実⁽⁶⁾」なのである。個人の行動は、この知覚された彼に、こ